

創造表現コース(3年生 国語研究)

現役の中日新聞記者から「取材」を学ぶ

今年度から新たに設置された学校設定科目「国語研究」の授業を創造表現コースの生徒が受けました。今回は特別講師の中日新聞記者小松原康平さんに取材の極意を教えてくださいました。

小松原先生は今年度から新たに名西におこしいただくことになりました特別講師の一人です。授業担当教員から紹介されると、生徒は拍手でお出



生徒の間を回る小松原先生

迎え。温かい雰囲気の中、授業が始まりました。

自己紹介が始まると、昨年度、「ハイスクール・アート・フェスティバル」(西文化小劇場)でオリジナル演劇を発表していた、当時二年生の生徒たち取材していたことが発覚。暖かい雰囲気そのままに、生徒と小松原先生の距離がさらに縮まりました。

今回の授業は、ペアをつくり、互い取材する活動でした。小松原先生から指示された取材時間は10分。この時間で取材を行い、後日、その内容を記事として原稿用紙におこすという新聞記者ならではの授業を展開していただきました。

素人の、しかも高校生が10分もの長い時間、取材ができるのだろうか、途中で止まってしまうのではないかと心配しておりましたが、そこは、さすがの創造表現コースの生徒。とても積極的に質問を重ね、見事に取材活動をしていきます。予想以上の素晴らしい活動に小松原先生も驚きを隠せない表情でした。



メモをとりながら取材をする生徒

記者役の生徒は、きちんと相手の顔を見て話を聞き、取材メモをとりながら疑問をぶつけていきます。取材される方の生徒は、創造表現コースの生徒らしく、身振り手振りで情報を伝えていきます。二次次に履修した「舞台表現」や「ダンス表現」といった授業の成果が表れているようです。

記者役の生徒は、きちんと相手の顔を見て話を聞き、取材メモをとりながら疑問をぶつけていきます。取材される方の生徒は、創造表現コースの生徒らしく、身振り手振りで情報を伝えていきます。二次次に履修した「舞台表現」や「ダンス表現」といった授業の成果が表れているようです。

あっという間に時間は過ぎ、授業は終了。一週間後にもご来校いただくことになっているので、そのときまでに今回の取材内容を記事にしておく運びになりました。はたして、生徒たちはどのような記事を作るのでしょうか。

小松原 康平

(こまつばら やすひら)

一九五九年、京都市生まれ。中日新聞社入社後、春日井支局長や首都圏編集部、社会部などでデスク(記者の原稿をチェックする立場)を務めた。学生時代からラグビーを続ける。現在は中日新聞編集部記者。